| | |
|---|---|
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |

1995年度　卒業・修士論文要旨集

# ソキエタス　第15号

東北大学文学部社会学研究室

# 目次

## 卒業論文

## 修士論文

H. G. ブルーマーのシンボリック相互作用論における
「行為者と社会との関係」再考

桑原　司

ブルーマーのシンボリック相互作用論が提起する「人間と社会との関係」ないしは「行為者と社会との関係」とは、パーソンズを中心とする構造機能主義社会学が有する「人間と社会との関係」に対する徹底したアンチテーゼであった。構造機能主義社会学が有する「人間と社会との関係」とは、簡潔に述べれば、社会が一方的に人間を形成するというものであった。そのような「人間と社会との関係」、換言すれば、社会による一方的な人間形成の論理に対して、ブルーマーのシンボリック相互作用論が提起したのは、それに対するアンチテーゼとしての人間による社会形成の論理であった。

本稿は、このブルーマーのシンボリック相互作用論における「人間と社会との関係」ないしは「行為者と社会との関係」を問い直すことを目的にしている。具体的には、本稿は、ブルーマーのシンボリック相互作用論の柱石を占めている「自己相互作用」(self interaction)概念との確固たる結びつきのもとに、そのシンボリック相互作用論の「理論」において、社会が「動的・過程的」である所以を解きあかそうとしている。

本稿が明らかにしたところによれば、ブルーマーのシンボリック相互作用論の「理論」においては、まず「行為者と世界との関係」は、その行為者の「自己相互作用」を通じて設定されるものと考えられていた。しかし、そのような「自己相互作用」は、フリーハンドになされるものではなく、その行為者が当該の「世界」(world)ないしはその世界を構成する「対象」(object)（具体的には他者ないしは他者達）より前もって獲得した、二つの「図式」に沿ってなされるものであると考えられていた。

この二つの「図式」に沿って、行為者は世界を定義し、その世界との間に、ある一定の関係を取り結ぶ。しかしこの「世界」は、行為者による一方的な定義を許すものではなく、そのような定義に対して「抵抗」(resist)ないしは「トークバック」(talk back)することができる「現実の世界」(world of

reality)でもあった。さらに、行為者は、この世界からの「抵抗」ないしは「トークバック」を手がかりとして、自らの定義の妥当性の如何を知ることができ、必要とあらば、自らの定義を修正し、その結果として、その世界との間に取り結んでいる既存の関係性を再構成するのであった。この意味で、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、「行為者と世界との関係」は、行為者による一方的な定義活動によって定められるものではなく、行為者による定義と、その定義に対する世界からの「トークバック」との相互作用ないしは相互影響の中で構成・再構成されるものとして捉えられていたことになる。

上記の知見を以て、ブルーマーの「ジョイント・アクション」(joint action)論を再考し、その結果として、社会が「動的・過程的」である所以を、「自己相互作用」概念との確固たる結びつきのもとに説明することにしよう。

我々の考察では、社会的相互作用に参与する行為者と他者との双方が「自己相互作用」の特殊形態としての「考慮の考慮」(taking account of taking account)を行い、それに基づいて互いに相手に対して行為し合うとき、そこに「ジョイント・アクション」＝「社会」が形成されると、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては見なされていた。ここで「考慮の考慮」とは、他者が考慮に入れていることを、行為者自身が考慮に入れることによって、また、それを他者の側も行うことによって、その行為者と他者とが「単に自分が相手のことを考慮に入れているだけではなくして、逆に、自分のことを考慮に入れている相手として、その相手のことを考慮に入れる」ことを意味していた。さらにその結果として、相手が自分に関して想定していることを、自分自らが想定することになるとするものであった。これを双方が適切に行った場合、「ジョイント・アクション」はスムーズに形成されるとするのが、ブルーマーの議論であった。

ここで適切な「考慮の考慮」が自他ともにおこなわれている場合、その行為者とその他者との間には「共通の定義」(common definition)が生じる。さらに、この「共通の定義」によって、「ジョイント・アクション」の安定した形態が繰り返し生起することが可能になる。またこの「共通の定義」は、社会的相互作用への参与者達が、同一の解釈図式を、すなわち、同形式の「考慮の考慮」

をおこない続けることによってのみ維持されうるものとして、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては捉えられていた。「ジョイント・アクション」＝「社会」が「動的・過程的」であるためには、この「ジョイント・アクション」がその形態を変容させるメカニズムが説明されえなければならない。換言すれば、社会的相互作用への参与者達が、自らの「解釈図式」ないしは「考慮の考慮」の仕方を変容させるメカニズムが説明されなければならない。

「ジョイント・アクション」を形成している行為者と他者というダイアディックモデルにおいては、行為者にとっては他者が、そして他者にとっては行為者が「対象」であり、互いが相手に関して「考慮の考慮」をおこなっている。さらに、互いに相手が「対象」であると言うことは、互いにとって相手は解釈され、定義される存在であると同時に、そのような解釈や定義に対して「抵抗」ないしは「トークバック」し得る「現実の世界」でもあると言うことになる。その結果、仮に他者が行為の再設定をおこなえば、そのことは、行為者の側から見た場合、その行為者にとっての「トークバック」を意味することになる。さらにこの「トークバック」を契機として、その行為者が行為の再設定をおこなえば、今度は、他者の側から見た場合、それがその他者にとっての「トークバック」を意味することになる。すなわち、どちらか一方に対して「トークバック」が向けられるときにはいつでも、それを向けられた側は、自己の行為の再設定をおこなうことになり、そのことが他方の行為の再設定を促すことになるのである。双方の行為の再設定がおこなわれれば、両者の間に成立している「ジョイント・アクション」の形態も変化することになる。しかも、このような変化の可能性は、常に存在している事を我々は明らかにした。というのも、この行為者と他者との関係においては、互いがいくら正確に相手を把握しようとしても、互いにとって相手は、常に「人間によって全く知覚されないかもしれないし、知覚されたとしても不正確にしか知覚されないかもしれない」「現実の世界」だからである。

以上のようにして、「ジョイント・アクション」＝「社会」は、人間の「自己相互作用」の形式の変化に伴って、その形態を変容させるのである。

しかし、このようなブルーマーの定式には、かねてから、それが「ミクロ主義」的であるとの批判が寄せられてきた。すなわち、「社会構造論的視点の欠落」ないしは「集合的レベルの事象を説明することの困難さ」が指摘されてきたのである。このような批判に対して、ブルーマーのシンボリック相互作用論の理論枠組みでも、マクロ分析が可能であるとの見解を堅持する種々の論者は、次のように反論していた。すなわち、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、「行為者」というタームは、「活動単位」(acting unit)とも表現されており、この表現が意味することは、「行為者」(「活動単位」)には、単に人間個人のみならず、「集団」も含まれているということである、と。すなわち、ミクロな領域を分析する際には、「社会」すなわち「ジョイント・アクション」を、それが「個人」と「個人」から形成されるものと捉え、マクロな領域を分析する際には、それが「集団」と「集団」とから形成されるもと捉えるというのである。しかし、このようなブルーマー論には、我々が考える限り、二つの欠点がある。そのうちの一つは、このようなブルーマー論では、マクロ分析をおこなう際には、ブルーマーのシンボリック相互作用論の柱石として位置づけられている「自己相互作用」が、分析の後景に退いてしまうということである。そしてもう一つは、このようなブルーマー論を想定すれば、ブルーマーのシンボリック相互作用論の方法論的な鉄則である「行為者の見地」(position of the actor)からのアプローチが、実行不可能なものとなってしまうということである。

社会理論の根底に「自己相互作用」概念を据え、かつ、方法論的鉄則として「行為者の見地」からのアプローチを遵守した上で、如何にしてマクロ分析をおこなうのか。これがブルーマーのシンボリック相互作用論に残された課題の最たるものである。